

3. 二人の秘密

敦賀市立松原小学校

6年 柴田 香実 磯邊 暢 奥田 紋吉
品川 翔貴 村中 花音



各務原市立蘇原第一小学校

6年 金武 礼子 山本 真理子 横山 侑紀

「なあ、今日遊べる？」

「うん、いいよ」

「どこで遊ぶ？」

「じゃあ、いつもの公園で」

ある晴れた日、ぼくは友達の友斗と約束した。ぼくの名前は『佐々木大介』。十二才の小学六年生だ。元気よく駆け出し、家に着くと玄関のドアを開け、大きな声で言った。

「ただいま」

「……」

返事はない。いつものことだ。

ぼくのお母さんは、小さい頃事故にあい死んでしまった。ぼくは誰とも話す気がせず、黙り込む日が続いた。そんな時、一人でいるぼくに話しかけてくれたのが友斗だ。それ以来大親友になったんだ。ぼくのたった一人の大事な存在。

「いってきまーす」

ドアを開けて一目散に公園まで走っていった。

公園では、赤い線が入ったグレーのシャツを着た友斗の姿が見えた。友斗はぼくの顔を見てにっこり笑いながら、

「大介、こっち、こっち」

と大きく手を振っている。ぼくは、

「友斗！ 来るの早いなあ」

と言って大きく手を振った。二人でサッカーをすることになった。サッカーは得意だ。ぼくは三回もゴールを決めた。三対〇でぼくの勝ち！

友斗は悔しそうに、

「うっ、強え！ 大介、やるなあ」

「へへ」

「次は負けないからな」

「それはどうかな」

「よし、もう一戦だ」

ぼくはゲームに夢中になって、時間を忘れていた。

「友斗、何しているの。早く帰ってきなさいって、あれほど言ったじゃないの」

友斗のお母さんだ。すごくおこっている。

「ご、ごめんなさい」

友斗は、ぼくの方を見ると、

「じゃ、また明日な」

と言って、お母さんと話しながら帰って行った。ぼくは一人で家に帰った。当たり前のことだけどさみしい。

「ただいま」

「……」

部屋にはいると、机の上には手紙が。

大介へ

今日も帰りが遅くなります。

シチュー温めて食べておいてください。

いつも、ありがとう。

お父さんより

ぼくは思わず、

「友斗ん家は、晩ご飯何かなあ」

とつぶやいてしまった。

次の日、ぼくはかぜをひいてしまい、学校を休んでしまった。

(あ～あ、今日友斗と遊ぶって約束してたのになあ……)

「おーい、大介」

「お父さん」

ドアを開けると、そこにはお父さんの姿が。

「病院行こう。かぜ薬もらってこよう」

お父さんは、ニッコリ笑って言った。

「うん」

そして、近所にある奥村病院へ向かった。ぼくの名前が呼ばれた。

しんさつを終え、薬をもらった。

「大介、悪いけどお父さんこれから仕事なんだ。一人で帰れるよな」

「うん」

ぼくは、お父さんから薬をもらおうとぶらぶらと歩き出した。なんだかこのまま家に帰りたくない。

近くの公園でブランコに乗りながらポーと空を見上げた。

「おまえ、何してんの」

この声は、もしかして友斗の声？

思わず声のする方をふり返った。やっぱり友斗だ。

「おー、友斗」

「おまえ、かぜじゃねえの。何？ ずる休み」

友斗は怒っているような声で言った。

「友斗……」

「大介のバカヤロー」

ダー。友斗がかけだした。

「ちがうだよ。友斗！」

だけど、友斗は見向きもせず、そのまま走っていった。心が痛む。どうすればいいんだろう。とにかくぼくも友斗を追って走り出した。もうちょっとで友斗に追いつく。

「友斗！」

ぼくの手が友斗の肩をつかもうとしたその時、

ピカーン！　バーン！

「雷か？」

「なんだ、あの雷……」

「おっきい音……」

「あれ？」

「どうした、大介」

「なんでぼくが目の前にいるんだ」

ぼくたちは、あわてて近くの窓ガラスをのぞき込んだ。

「うわっ！　おれ、大介になってるし」

「えっ、友斗……」

なんと、ぼくと友斗は入れ替わってしまったのだ！

その日、仕方なく、友斗になったぼくは友斗の家へ、ぼくになった友斗はぼくの家へと帰っていった。

「大介、最近学校どうだ」

「えっ、う、うん。別に」

「なんだ。大介らしくないなあ。いつもとちがうぞ」

「そんなことはないよ」

「そうか。お父さん、今から仕事だ。今日は早く休むんだぞ」

ガチャン。

(はあ、ひとりぼっちか……。大介はいつもこんななのかなあ。さみしくないのかなあ。大介、今ごろ何しているんだろう)

「ごちそうさま。おなかいっぱい」

ぼくは、みんなで食べるご飯に大満足だった。

「友斗、ご飯が終わったんだから、勉強しなさい」

「ええっ、さっきしたじゃん」

「何言ってるの。テストで悪い点をとっても知らないわよ。早くしなさい」

すごい顔でにらんでくる。

「ハイ。ハイ」

(はあ～。たいへんだなあ。友斗はいつもこんななのかな。これだったら大介がいる方が気楽でいいや)

その日の夜、友斗になったぼくは十時まで勉強し、ぼくになった友斗はひとりで十時

までテレビを見ていた。

朝、ぼくになった友斗は、ひとりで起き、自分でパンを焼き、牛乳を飲み、学校へ向かった。一方、友斗になったぼくは、お母さんに服を出してもらい、お母さんが作った目玉焼きとスープとご飯を食べて学校へ向かった。

「大介！」

「友斗！」

ぼくたちはすごいスピードでかけ寄った。おたがいの目を見ると、言いたいことはわかる。友斗とぼくは、手と手をはっきりとにぎりしめ、声を合わせてさげんだ。

「もとにもどる方法、ぜったいみつげようぜ」

なにがなんでも、絶対に大介にもどってやる。★

その後、ぼくと友斗は、元に戻る方法を考えるが、とても思いつかなかった。仕方なく、しばらくぼくは友斗で、友斗は大介のまま一学期の終業式を迎えた。先生にももらった通知表は教室では見ず、帰り道に交換した。大介になった友斗は、笑いながら、

「ぼくの成績上がった！」

逆に友斗になったぼくは不機嫌だ。

「ぼくの成績は下がってるじゃないか」

「まあまあ」

どうすることもできなかった。

その夜、友斗の家では、ご機嫌なお母さんがいた。

「やればできるんだから」

鼻歌まじりでにこにこ顔だ。

(友斗よかったね。それに比べて今頃うちのお父さんは、がっかりしているだろうなあ)

そんなことを考えていると、お母さんが、

「今朝、いなかのおじいちゃんから電話があってね、夏休みに泊まりに来ないかって言ってるんだけど、友斗行く？」

友斗のおじいちゃんには会ったことがないけど、このまま友斗でいるのも窮屈なので、

「うん、行く。おじいちゃんに親友を紹介したいから、大介も誘っていい？」

お母さんは少し考えてから、

「大介君のお父さんがいいとおっしゃるのならいいわよ」

と言ってくれた。そこでぼくは、ぼくになっている友斗に電話した。

「今度、友斗のおじいちゃんの家に行くことになったんだけど、一緒に来てくれる？」

「お父さんに聞いて、いいよって言われたらいいよ」

「ぼくだけじゃおじいちゃんと話が合わないから絶対来てよね」

と言っておいた。

次の日、ぼくになった友斗から電話がかかってきた。

「お父さんがいいって言ったから、一緒に行けるよ」

「おじいちゃん家にいる間に、元に戻る方法をまた考えよう」

「おう、そうだね」

貴重な三日間になりそうだ。

次の土曜日、友斗になったぼくと、ぼくになった友斗は、一緒に友斗のお母さんの車に乗っていた。車の中で、ぼくは友斗のお母さんに聞こえないように、おじいちゃんについてこっそり聞いた。

「おじいちゃんって、やさしい？」

「うん、やさしいよ」

「おじいちゃんって、物知り？」

「たぶん物知りだと思うよ」

「じゃあ、あのこと、聞いてみる？」

「あのことって？」

「ぼくたちのことだよ」

「それ、いいね」

「でも、信じてくれるかな？」

「どうだろう……」

そうこう話しているうちに、おじいちゃん家に着いたようだった。

お母さんは、

「それならおじいちゃん、三日後に迎えに来ますので、よろしくお願いします」と言って帰っていった。おじいちゃん家は、自然がいっぱいのいなかの古い家だった。

おじいちゃんはやさしそうな笑顔で、ぼくたちを迎えてくれた。ぼくを見て、

「友斗、しばらく見ないうちにまた大きくなったなあ」

そして、ぼくになっている友斗を見て、

「君が大介君かい。ゆっくりしていっておくれ」

と言った。そこでさっそく、

「実はおじいちゃん、ちょっと話があるんだけど……」

大介になっている友斗が話し出したので、おじいちゃんは少々不思議そうだった。

「ぼくたち、雷が落ちて入れ替わってしまったんだ。どうすれば元に戻れるかなあ」

おじいちゃんは予想に反して驚きもせず、

「実はわしも昔、親友の一郎と入れ替わってしまったことがあるんだよ。あれは夢だったのだろうか、と一郎と話していたのだが。そんなことがまた起こるなんてなあ」

と言った。それを聞いて、反対にぼくたちが驚いてしまった。そのままおじいちゃんは話を続けた。

「わしらは、こんな方法を試したと思うんじゃが……」

ぼくになった友斗は、

「それ、教えてよ」

と言った。友斗になったぼくも、

「うん。教えて」

と言った。おじいちゃんはこう続けた。

「昔のことではっきり覚えておらんのだが……。やしま神社に行って、神様にお祈りをした。朝日の森で、頭をぶつけ合った。雷山の頂上に行った。そのどれかで戻ったと思うんじゃが。はて、どうだったかのう？」

その言い方に少々不安を感じたが、今はその方法に頼るしかない。

さっそくぼくたちは次の日に試してみた。まず、やしま神社に行って願い事をした。
「どうか、神様。ぼくたちを元の体に戻してください」

一生懸命、何度も願ったが、何も起こらなかった。そこで、朝日の森に行って、今度は頭をぶつけ合った。

「いっせいのうで」

ゴチンッ。

「いたい」

ぼくたちは、声をそろえて言った。目から火花が出たかと思った。でも何も起こらなかった。がっかりして、その日はおじいちゃんの家に戻った。玄関で待っていたおじいちゃんは、ぼくたちのがっかりした顔を見てうまくいかなかったことがわかったようだった。

三日目の朝、頭の痛さで目が覚めた。鏡を見ると、大きなたんこぶができていた。朝ご飯を食べて、さっそく雷山に向かった。夕方五時にお母さんが迎えにくるので、腕時計を渡された。

二人で険しい道を歩いていくと、道が二つに分かれていた。どちらに進むか、二人で木の棒を倒して道を決めた。そのまま進んでいくと道がなくなり、迷ってしまった。

「おまえが、棒を変な方向に倒したから迷子になったんだぞ」

ぼくになった友斗が言った。

「ぼくだけじゃないだろ。友斗だって倒したじゃないか」

そう言って、後ろを振り向くとぼくになった友斗がいなくなっていた。

「友斗、どこだあ？」

と、叫んだ。でも返事はなかった。慌てて戻ってみると、大きな穴が開いていて、中を見ると、ぼくになった友斗が足を押さえて痛そうに顔をゆがませて座っていた。

「大丈夫かあ？」

「なんとか大丈夫」

「立って手をつかむことはできそうか？」

「やってみる」

ぼくは思い切り腕を伸ばして、穴の中に手をさしのべた。友斗も痛いのを我慢して手を伸ばした。その時、

ピカーン。

まわりが一瞬明るくなった。

「……今のは、何だろう」

気がついたら、上で手をさし出しているはずのぼくが、穴の中にいる。びっくりして上を見ると、友斗が手をさし出していた。

「あれっ、戻ってる」

「やったあ、戻った」

と友斗も言った。友斗がぼくを上げてくれた。

「助かってよかったなあ」

「これからも仲良くしていこうな」

お互い自然に手を握りあっていた。ぼくが立とうとすると、

「痛い」

元に戻ったぼくの足が痛くなっていた。

「おぶってやるよ」

照れながら友斗が言った。ぼくは友斗におぶわれながらおじいちゃんの家に戻った。

おじいちゃんの家では、帰りが遅いぼくらを心配して、お母さんが怒って待っていた。

「こらあ。こんな時間まで、どこほっつき歩いているのよ」

と怒鳴られた。でも友斗は、久しぶりにお母さんに怒られてうれしそうに見えた。ぼくたちの様子を見て、おじいちゃんは元に戻ったことがわかったようで、ピースサインを送ってきた。ぼくらもこっそりピースした。

久しぶりに本当のぼくの家に戻って、久しぶりにお父さんに会えてうれしかった。

それから三年後、第一志望の高校と一緒に受かったぼくと友斗は、仲良く楽しい高校生活を送っている。